



# 4~5月の漁海況 (内海側)

## 海況

今年2月には連続的な寒波の来襲により、播磨灘、大阪湾の水温は昭和38年と同様の低水温(例年より2.0~3.0°C低目)を示しました。その後、3月中旬から外温期に入ったが、4月上旬の観測結果でもなお例年より1.5~2.0°C低目を示している。しかし、4月以降の水温上昇は昭和38年より幾分早く、南海域の表層水温は次第に例年水温に近づいている。5月上旬にはなお例年より1.0°C内外低目であるが、14~15°Cに達する見込。

一方、冬以降かなり高目であった南海域の塩素量は徐々に低下しているものの、沖合深部では依然高目である。また南海域のプランクトンは動物プランクトンが大半を占め、まだ春の植物プランクトンの増量はみとめられない。

## 漁況

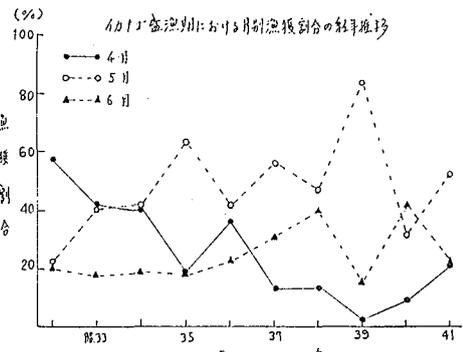
イカナゴ——前報通り、本年のイカナゴ当才魚漁は約1ヶ月おくれたが、4月中旬ころから波路沿岸で漁獲されはじめ、4月下旬になってやや安定した漁獲をがしている。昨年4月上旬~中旬の連日降雨(例年の2倍量)によって操業も制約されたが、今年は比較的順調な天候といえる。いつれにしても、近年は食用としてよりも、養魚飼料としての需用が大いに増大したため、従来より成長した大型の当才魚により大きな漁獲努力がはらわれているので、漁獲の山も4月から5月に移行している。例のようにイカナゴ当才魚の盛産期(4~6月)における月別漁獲割合の経年推移を示すと明らかである。4月の漁獲割合は経年的に漸減気味であるが、5、6月は増傾向を示し、昭和37年以降は80%以上が5~6月の漁獲量となっている。また、好漁年(昭和38年、40年)には6月の漁獲割合も大きくなる傾向にある。これを主要漁業の変遷からみると、従来まで300~400統のこまじ網が当才魚の主要漁業であったのが、近年急減し、船隻網およびばつち網による成長群の漁獲が増えたためであるといえる。今年も当才魚に大小の2群性がみとめられないので、5月が漁獲の山となり、6月~ばいまで操業も可能であるが、単位漁獲量は昨年を下廻るものと思われる。

カタクチイシ——前述のように低水温のため親魚の来遊はおくれている。例年の産卵期は4月中旬~下旬から始まり5月中旬~下旬がその盛期であるが、今年は5月上旬過ぎから産卵期となる見込み。和歌山県沿岸のシラス情報では、4月上旬から漁獲のじり増を示し始め、中旬には来遊群も増加しているが、湯浅、和歌の浦のような北部沿岸ではまだ漁がうすい。

## その他

昭和38年以降出現しているマサバは今年も来遊するが、昨年のように大量ではない模様。6月ころから12~15cm級のものが出現するものと思われる。マアジは昭和38年に当才魚が多獲されたが、その後経年的に減少しているため、多くとも昨年並。

参考資料 南海西海区長期漁海況会議資料(43年3月)  
和歌山県水試、漁海況速報 第51号 第3号  
水試(浜田) 以上



## ハマチ養殖と飼料 (人工配合飼料の現状)

(人工配合飼料の現状)

昭和三十九年頃までは瀬戸内海が中心であったハマチ養殖も、ここ数年前から三重、高知、愛媛県などから区別飼料生産地から「最近における配合飼料の現状」について、その要旨をとりまとめた。

### 養殖と人工飼料

ハマチ養殖の配合飼料については、三、四年前から兵庫を含めて、ハマチ関係の水産試験場で試験研究が行なわれ、最近では、完全費の大半を占める飼料が高くないが使用可能なエサが出てきたといえる。

### 配合飼料の現状

人間も魚も必要な栄養素は同じで、ただハマチのような肉食性の魚は植物性物質の消化酵素を持たないとい以外にはほとんどかわりがない。現在出来ている配合飼料の成分を別表に示したが、その主体はフィッシュミール(魚粉)で、これにミール(小麦粉)で、これに色々と必要な成分を配したものが配合飼料である。

養殖が増えることにより、養殖の問題の一つに飼料の問題がある。エサが不足しなくなると、養殖は、完全費の大半を占める飼料が高くないが使用可能なエサが出てきたといえる。

配合飼料の必要量が考えられる本質的な原因は、エサの値段や質の問題であるが、さらに現在における理由をあげれば、  
1 ナマエサ不足の解決  
2 広い視野における世界的な食糧不足の解決  
3 FAOの白書によれば三〇世紀に入ると世界の人口が今の二倍になり、その時の食糧不足が予想されているので、今後、養

成長に必要な栄養素と配合飼料

必要栄養素	配合飼料中の物質
蛋白質	フィッシュミール(魚粉)
脂肪	油添加(フィードオイル)
炭水化物	— (鉄化合物)
繊維	グルテン(粘結剤)
ビタミン類	酵素(消化率向上用)

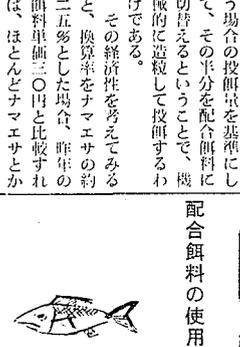
**「夜光虫」**  
暖かい地方の海で広く分布しているプランクトンで、体は球状しており、大きさは直径1~1.5ミリメートル位で肉眼でもみとめられる。顕微鏡で見ると、口とその近くに太い一本の触手(ひげのようなもの)をはっきりと見ることが出来る。体は透明でうす桃色をしている。  
日本沿岸では春から夏にかけて多く発生する。口から小形のプランクトンをエサとしてとり入れるので夜光虫が著しく増殖した場合には小形プランクトンはほとんど食いつくされてしまうこともある。本種は海水の運動すなわち波やその他の刺激によって青緑色の光を発するので夜光虫と呼ばれる。体が非常に軽く表層に浮遊しているので風や波、潮流等により1ヶ所に集積されることが多い。また前述の形や色のため漁業者の中には魚の卵と思っている人があつたが間違いない。夜光虫が異常に大量に増殖して赤潮を引き起すことも多いが、ひどい時は海水がトマトジュースに似たような色になり漁業に被害をおよぼすこともある。(管)

ハマチ1kgを作るに要する飼料の量

	研究	実際	統計
生飼	5.5	6~8	7.7
配合	2.1	2.3~3.0	—

このように配合飼料の特長としては、  
1 ナマエサのように鮮度の良否に關係なく、品質が安定している。  
2 栄養価のアンバランスが少なく、栄養障害が少なければ、より完全なものが出来ることは確実である。  
3 病気に罹った時、薬をエサに混ぜることは、魚粉が主体であるから、消化はナマエサに比べて良くないが、酵素添加により解決できる。

配合飼料の使用例  
現在、かなり多くの飼料メーカーから販賣されており、値段も一キロ当たり八〇~一五〇円位であるが、全漁連が今年から発売した配合飼料の使用例を例に示してみた。



投餌経費を加えてもナマエサの値段が三割を占めると考えられる。

**ヨボロ マリンディーゼル**  
いつも漁場が一番のり

- 主機用 4~1000馬力
- 補機用 8~3000馬力

国づくりからつくりまで  
久保田精工

●3MKE形/35馬力

**魚場と市場を結ぶ!**

●PM形/3馬力~4馬力

●T形/10馬力~20馬力

●臨時主機用 3~800馬力

**ヤンマーディーゼル**

ヤンマーディーゼル株式会社 / <本社>大阪府北区茶臼山62番地



